

谷井 嶺太（東京学芸大学附属国際中等教育学校四年生）

先日、学校の英語の授業で「英語を日本の公用語とすべきか」という論題についてディベートを行った。僕達の班は英語教育にかかる時間や費用の点から反対したのだが、「円滑なコミュニケーションができれば、日本語に固執する意味は無い」という賛成派の意見や「日本語は日本人の文化でありアイデンティティーでもある」という他の反対派の主張を聞いて、僕は「日本語の良さとは何だろう」と改めて深く考えさせられた。

僕の通っている高校は帰国子女も多く、英語の教育に力を入れているため英語の授業数が多い。また理科や社会などの一部の授業は選択すれば英語で受けることもできる。そのため僕は英語を母語とする外国人の先生に授業をして頂く機会も多々あるのだが、そのときに戸惑ってしまうのがその先生に対する言葉遣いである。つまり、敬語だ。

日本語では目上の人と話す場合、どんなことを言うにしても敬意を含む言い方がある。例えば話している相手が先生だったり先輩だったりすると、まず間違いなく語尾に「です・ます」をつける。動詞は「お〜になる」「〜になる」となったり、言葉自体が変化したりする。その種類も実に様々である。

例えば、「行く」という動詞を一つ例に挙げると、尊敬語では「いらっしゃる」「行かれる」「おいでになる」、謙譲語にすると、「参る」「伺う」「参上する」、丁寧語にすると「行きます」など、同じ事柄を表現するときでも何通りもの敬語表現がある。

しかし英語ではそれがなかなか無いのだ。

日本語で「い〜へ行くの？」と言つのも「ぢぢらへ行かれるのですか？」と言つのも英語では「Where are you going?」で済んでしまう。

もちろん、英語でも「Could you ~?」や「I'm afraid ~」など文章に足すことで丁寧な言い方になる表現はあるが、「go」という単語自体が変化して敬意を含むことはないし、日本語の敬語とは若干ニュアンスが違う。だから日本語を使うことに慣れていない僕は英語で目上の人と話するとき、違和感を覚えてしまう。

また「英語と日本語の違い」の別の例としてもう一つ、「否定型の質問に対する答え方」が挙げられる。具体的に言えば、「〜知らない？」と聞かれたとき、自分がそれを知らなければ日本語だと「はい、（知りません）」となるが、英語では「No, (I don't know).」となる。何故日本語と英語で答え方が真逆になるのか。それは自己主張の強さ

の差が出ているからだ」と聞いたことがある。あくまで自分が「知らない」から「否」と言う英語に対して、日本語は相手の尋ね方に応じて「そうなのかそうでないのか」というように答える。即ち質問した側（相手）の聞き方を重んじてそれに合わせるのだ。

この差異も日本語の本質をよく表しているのではないかと僕は思う。

では日本語の魅力とは一体何か。それは「相手を尊重する心」だと僕は思っている。柔道や剣道、空手道などに代表される日本武道はみな常に礼儀を重んじる。所謂「自他共栄」の精神だ。僕は日本語という言語にも同じようにその心が宿っていると思った。日本語には「言霊」という考え方がるように、昔から日本人は言葉が持つ不思議な力を信じていたのだろう。だからこそ、「相手を尊ぶ」という大切な心を言葉に乗せたのだと思う。そんな日本語が僕達に教えてくれることはたくさんあるだろう。これからは僕は日本語を学び、日本語で学び、日本語に学んでいきたいと思う。